

# 浮遊する十字架—15世紀ネーデルラント美術における

蜷 川 順 子

キリスト教美術や文化において、もっとも頻繁にみられる象徴記号は十字形である。十字形には、縦軸と横軸の長さが同じギリシャ十字や、聖アンデレの殉教で用いられた X 字形に交差する磔刑架の聖アンデレ十字、古代エジプトでも知られており大アントニウスと深く関連する T 字形十字（タウ十字または接合十字）など、さまざまな基本形が知られている。一般に十字架と呼ばれるのは、エルサレムのゴルゴタの丘で、他の罪人たちとともに処刑されたイエス・キリストの磔刑架として知られる、縦軸が横軸よりも長いラテン十字と呼ばれるタイプのものである。このイエス磔刑の十字架に罪状書き（INRI：Jesus Nazarenus Rex Iudaeorum「ユダヤの王ナザレのイエス」）が取り付けられたことにより、もう一本の横軸を備えたローヌ十字または複十字、二支十字と呼ばれるものもあり、このタイプは西洋では総大司教のための聖具に用いられた。また、三本の横軸がある十字形はもっぱら教皇のものとしてされた<sup>1)</sup>。ちなみに茨木市千提寺で発見された17世紀のキリシタン墓碑にも複十字と思われるものがあり、これはカモフラージュのために「千」の字に似せたとも考えられる<sup>2)</sup>。

このように多くの派生形があるが、西洋キリスト教美術における基本形は聖書における物語（『マタイ』27：33-56、『マルコ』15：22-41、『ルカ』23：33-49、『ヨハネ』19：17-37）にその根拠があるラテン十字架である。ゴルゴタの丘に立つ十字架という磔刑図は数多く描かれてきたが、そうした中で大地に立つのではなく、天に現れた、あるいは空中に浮かんでいる十字架を目にすることがある。ここで念頭にあるのは、15世紀前半のトゥルネーで活躍したロベール・

カンパン (c. 1375-1444) こと「フレマールの画家」周辺で制作されたと考えられる、《受難の道具をもつ三天使がいる十字架のキリスト》<sup>3)</sup> [図1] の浮遊する磔刑図である<sup>4)</sup>。ここにあげたブリュッセル本はオリジナルと考えられているが、近代に切り離されて画面上では寄進者や聖母が外されている。ブリュッヘやマドリードに残る異本から、本来は地上に聖母と寄進者が描かれていたことがわかる<sup>5)</sup>。筆者はこの磔刑図は聖母の聖心に関係するという仮説のもと、複数の角度からアプローチする計画を立てているが、本稿ではその前提として、十字架がゴルゴタの丘という物語的文脈から離れて成立した事情を、

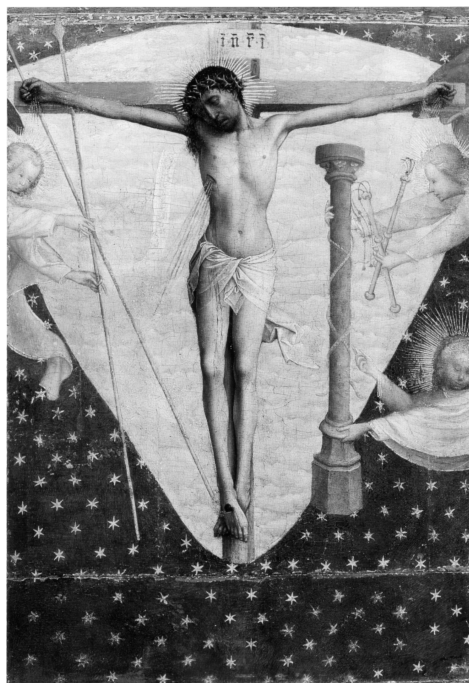


図1 「フレマールの画家」周辺《受難の道具をもつ三天使がいる十字架のキリスト》15世紀前半，オーク，37.7×26.6 cm (再構成)，ベルギー王立美術館，ブリュッセル

造形資料に限らず文字資料にも探り、15世紀の「浮遊する十字架」図像の成立条件をあきらかにする。

そのために、磔刑が行われた古代末に遡り、1章では「木の十字架と象徴的十字架」、2章では歴史の転換期に「コンスタンティヌス1世（270代前半-337、在位306-37）に現れた十字架」、3章では「古英詩『十字架の夢』木の十字架から光の十字架へ」、4章では「聖フランキスクス（フランチェスコ）のヴィジョン」、5章では「結びに代えて—聖母の聖心の中の十字架」の順に論じて、上記の仮説の蓋然性を高めることを目的としている。

## 1. 木の十字架と象徴的十字架

十字架上のキリストの死は、キリスト教における中心的概念であるが、初期教会がこの主題を取りあげることはなく、カタコンベの時代と呼ばれるローマ帝国のキリスト教弾圧期には、磔刑はキリストを表わす小羊を十字架と併置させることでその犠牲的死が象徴的に表現された。イエスの人像が磔にされた図像は5～6世紀にはじめて登場したと言われ、ビザンツから古代の人体表現が西側に流入したカロリング朝期以降、象牙彫刻、金銀細工、写本挿絵などにおいて、盛んに描かれるようになった<sup>6)</sup>。

十字形は自然現象として目撃されることもあり<sup>7)</sup>、また、磔刑はローマ時代には処刑の方法として広く採用されていたものである。ただし罪人は、後の十字架の道行き場面のイエスにみられるように十字架を担いでいくのではなく、横木（patibulum）に両手を縛りつけられた状態で刑場に挽いていかれ、刑場に垂直に立てられた支柱（stipes）に横木に固定された状態で持ちあげられて、最終的に十字形となる手順であった。十字架立てや十字架降下や足載せ台（suppedaneum）は、イエスの死と十字架を結びつけるための後代の創作である<sup>8)</sup>。

### 1-1 新約聖書外典『ペテロ福音書』と象徴的十字架

十字架が単なる処刑具ではなくキリストの栄光と結びつけられる契機はどこ

にあったのであろうか、ホーガンは、新約聖書外典として知られる初期ユダヤ-キリスト教文書の『ペテロ福音書』に、それがあるとしている<sup>9)</sup>。

荒井によれば、「外典」は伝統的に「アポクリファ」（「隠されたもの」を意味するギリシャ語に由来）と呼ばれ、もっとも一般的には、新約聖書「正典」がまとめられていく過程で、そこから除外された諸文書、いわゆる「典外書」のことをさす。たとえば正典成立史上重要な役割を果たしたアタナシオス（295-372）は、現行新約聖書の文書を正典（「靈感による書」あるいは「まことの書」とし、その他の文書をアポクリファ（「異端の虚構」あるいは「汚れなき者を欺くもの」と名付けた<sup>10)</sup>。

アタナシオス以前の分類はさまざまであるが、『ペテロ福音書』は、カイサレイアのエウセビオス（260頃-339頃）が「異端の」（*hairetikōn*）と区分した文書に含まれる。ちなみにこれは、彼による「公認されたもの」（*homologoumena*）と「問題のあるもの」（*antilegomena*）に続く、第三の区分になる<sup>11)</sup>。

異端というこの区分は<sup>アポクリファ</sup>隠されたものに当たる。そして、多くの場合直接イエスによって啓示され、使徒たちによって伝えられる「秘義」（アポクリフォン）が記された秘書のことを指す。初期教会時代最大の異端といわれるグノーシス派においては、直接イエスに遡るアポクリファは「正典」よりも高く評価されているのである。その一方で外典は、正典の中に動機はあるけれどもその記事が欠けている部分を創造力によって補足する傾向をもち、『ペテロ福音書』は、イエスの処刑場面を補足するとされる<sup>12)</sup>。

しかしながら、十字架がキリストの栄光と結びつけられるのは、復活と地獄下りのくだりの箇所である。少し長くなるが、該当部分を以下に引用する。

「夜中に、兵隊が二人ずつ当番で夜警をしていると、天で大きな声がした。そして天が開いて、二人の人がそこから降りて来るのが見えた。彼らは強く輝いていた。そして墓に近づいて来た……(中略)……墓が開き、二

人の若者は中には行って行った。

（見張り番の）兵隊はこれを見て、百卒長と長老達を起こした……（中略）……また墓から、今度は三人の人が出て来るのが見えた。そのうちの二人が一人を支え、そのあとから十字架がついて来た。二人の頭は天までとどき、二人が手をひいている三人目の人の頭は天をつきぬけていた。そして天から声が聞こえた、「あなたは（冥府で）眠っている人々にも宣教しましたか」。

すると十字架が答えて、「はい」と言うのが聞こえた。

（『ペテロ』9：35-10：42）<sup>13)</sup>

正典四福音書では、墓から出てくるイエスの姿や十字架は触れられていないが、『ペテロ福音書』において、1) 十字架はもはや単なる処刑台ではなく、復活というキリストの栄光と結びつく。2) また、十字架はキリストとともに地獄へ下り、彼とともに墓から現れる。すなわち、死んで、埋められて、復活する栄光化のプロセスを共有している。3) 十字架は生きて話すことができる。4) 眠っている人々に説教したかという問いに答えたのは、十字架である。旧約時代に正しき行いをした人々に対するキリストの冥府での説教は、正典では『ペテロの手紙一』で触れられるが、ここでは十字架が説教したことになっている<sup>14)</sup>。キリストの頭部は天を突き向けているため、地上のキリストは天の声に応えた十字架と同一視されているのである。

同じくエウセビオスが「異端」とした文書『ヨハネ行伝』にも、処刑台ではない十字架が登場する。それはエルサレムで十字架に架けられたまさにその時に、イエスがヨハネに現れ、しっかりと固定された光の十字架を示した。イエスはそれが、「言葉」、「理性」、「イエス」「キリスト」「門」「道」「パン」「種子」「復活」「子」「父」「霊」「生命」「真理」「信仰」「恵み」と呼ばれ、すべてのものをひとつに固めた十字架だとし、木の十字架とは異なるものだとした<sup>15)</sup>。

これらの新約外典において、十字架は単なる処刑台ではなく、栄光化され象

徴の意味を担うが、『ヨハネ行伝』の光の十字架さえ、天空に浮かんでいるわけではなく「しっかりと固定されて」いる。こうした外典にみられる象徴主義は、ダニエロウによれば、2世紀の半ば頃までには、十字架に関する思弁へと発展し、正統派においてもグノーシス派においても、十字架は復活したキリストの宇宙論的普遍性を表わすために、さまざまな次元で用いられるようになった<sup>16)</sup>。

## 2 コンスタンティヌス1世に現れた十字架

こうした思弁的考察が活発に行われていた頃、光の十字架が地上での具体的な恩寵につながった出来事が記録されている。それはカイサレイアのエウセビオスとその著『コンスタンティヌス帝の生涯』に書いた、皇帝自身から聞いたとする誓いに関する記述である<sup>17)</sup>。

コンスタンティヌス1世は、四帝統治時代のローマ帝国で、西の正帝となった父コンスタンティウス・クロルス（在位305-6）がブリタンニアで戦死した後、その軍団を率いて306年に正帝を自称し、対立する皇帝たちを打ち破りローマ帝国を再統一した。空の十字架の物語が関係するのは、マクセンティウス（278頃-312、在位306-12）を破った312年の、ローマのティベレ川に架かるミルウィウス橋の戦いにおいてである。

ローマ市の覇権を決定づけることになるこの戦いにおいて、戦い当日の正午、空に「これによって勝利する」という文字とともに光の十字架が現れ、これを目撃した全軍が奮起し、マクセンティウス軍を破った。その夜の皇帝の夢に、十字架をもったキリストが現れて、敵に勝利するためにこの徴を使うように命じた。皇帝はこの命に従って十字架<sup>18)</sup>を身につけるよう軍律を作り、その意味をキリスト教徒に尋ねたと、この出来事から数年後に書かれた手紙に書かれている<sup>19)</sup>。他方、ラクタンティウス（240頃-320頃）の『迫害者たちの死』には、天空の十字架には触れられていないが、天の神の徴である十字架を盾に記すように命じた夢とミルウィウス橋での戦いに勝利したことが記されている<sup>20)</sup>。

エウセビウスもラクタンティウスも、この出来事ゆえに皇帝が改宗したとは

述べていない<sup>21)</sup>。エウセビウスはヴィジョンの意味について、それが軍の徴になったという以外は沈黙を守っている。これは、象徴的十字架が記載された文書を彼が異端としたことと、無関係ではないだろう。

天に現れる十字架は他にも報告されており、たとえば、4世紀半ばのエルサレム主教聖キリル（キュリロス、キリロス、315頃-86）伝には、皇帝がゴルゴタの丘に聖墳墓聖堂を建設し、ここで説教をしていたキリルは351年5月17日に太陽よりも輝く十字架が天に現れたと記録している<sup>22)</sup>。天の十字架の意味はさまざまに解釈されており、「そのとき、人の子の徴が天に現れる」という『マタイ』24：30に基づき、『ディダケー（十二使徒の遺訓）』をはじめとする文書で、終末論的な解釈がなされている。たとえば、『ペテロ黙示録』（2世紀前半）や『エリア黙示録』（エジプト、3世紀末）では、再臨のキリストは「先行する十字架とともに、天の雲に載って」到来すると記され、キリルは洗礼志願者のための秘儀教話で、最後の日に、輝く十字架が王の前に現れることになると話している<sup>23)</sup>。

最初期からキリスト教徒は東を向いて祈り、集会所の東の端に、キリスト再臨に先行する徴である十字架を描いていた。ラヴェンナのサン・アポリナーレ・イン・クラッセのアプス〔図2〕などに描かれた十字架は単なる装飾に留まらない意味をもつのである。バシリカ式聖堂が東向きに建てられるのも同じ趣向に基づくが、自然主義的な太陽神信仰との差異化を図るため、「太陽より7倍強く輝く」『ペテロ黙示録』（エチオピア語本）などの文言が含まれることもある。

## 2-1 聖ヘレナ（246/50-330）と木の十字架

初期キリスト教時代の思弁的考察、および皇帝の改宗によって教会の勝利が決定的になっていく過程で、木の十字架の身体性—ひいては人の子の身体性—が忘れ去られようとしていたかにみえた頃、地中に埋められていた十字架がコンスタンティヌス帝の母ヘレナ（255頃-330頃）によって掘りおこされた。エ



図2 《空に浮かぶ十字架》6世紀，モザイク，サンタポリナーレ・イン・クラッセ聖堂，ラヴェンナ

ウセビウスはこの出来事に触れておらず、395年のアンブロシウス（340頃-97）に記載がある<sup>24)</sup>。いくつかの異本を照らし合わせた『黄金伝説』の記述に基づくなら、聖十字架と呼ばれる木の十字架発見の顛末の概略は以下のようになる<sup>25)</sup>。

洗礼を受けて完全なキリスト者になった皇帝は、聖十字架を探すために、母后ヘレナをエルサレムに送った。エルサレムに着いたヘレナは国中のユダヤ人の学者たちを召しだした。十字架が埋められた場所を問うヘレナに、ユダヤ人たちはユダという名前の人物が知っているとして、彼を引き渡した。なかなか口を割らないユダからその場所を聞きだしたヘレナは、埋められていた三本の十字架から、罪状書きによって聖十字架を特定した（326年）。その後ユダは洗礼を受けてクィリアクスを名乗ったが、背教者ユリアヌス（331/2-63、在位



361-63) によって殺害され殉教者となった<sup>26)</sup>。

ヘレナは発見された十字架の一部を銀の櫃に入れてエルサレムの元あった場所に安置し、残りをコンスタンティノープルの皇帝の元に届けた。その後木は断片化されてさまざまな形で贈り物に用いられたことが知られている。884年、ローマ教皇マリヌス1世 (?-884, 在位882-84) は木の断片を、イングランドのキリスト教文化を復興させたアルフレッド大王 (849-99, 在位871-99) に送った<sup>27)</sup>。木の十字架の断片は、次節で扱う古英詩『十字架の夢』と深く関連する。

### 3 古英詩『十字架の夢』木の十字架から光の十字架へ

空中に浮かぶ象徴的な十字架が、次に注目されるのは8世紀頃のアングロ＝サクソンの古詩『十字架の夢』の詩文中に登場する十字架においてである。

『十字架の夢』は最古の英詩として知られ、リズルの十字架と呼ばれる、7世紀半ばから8世紀半ば頃にラスウェル（リズル）村（元ノーサンブリア、現スコットランド、ダムフリーズ州）に建立された石造りの十字架に刻まれている碑文である。この碑文がその一部を成している詩文が、10世紀末頃にウェセックス出身の写字生が書き集めたと思われるアングロ＝サクソンのキリスト教詩文集（MS CXVII）に含められている。この写本を保管している司教座聖堂参事会図書室（以下聖アンドレアス聖堂と略）はイタリアのヴェルチェリにあることから、この地名を冠して呼ばれることが多い。さらに同じ頃に制作されたブリュッセルの十字架と呼ばれる聖具に、その一部が刻まれている。ここでは、基材を変えて伝えられてきたこの詩文中の十字架の図像的意味について概観する<sup>28)</sup>。

#### 3-1 ラスウェル（リズル）の十字架 [図3]

リズルの十字架は、ラスウェル村の郊外にある小さな教区教会の洗礼盤の傍に置かれ、現在はおよそ5m 28cmの高さである。この十字架は元々野外に置かれていたが、スコットランド教会総会令により1642年に破壊されバラバラに

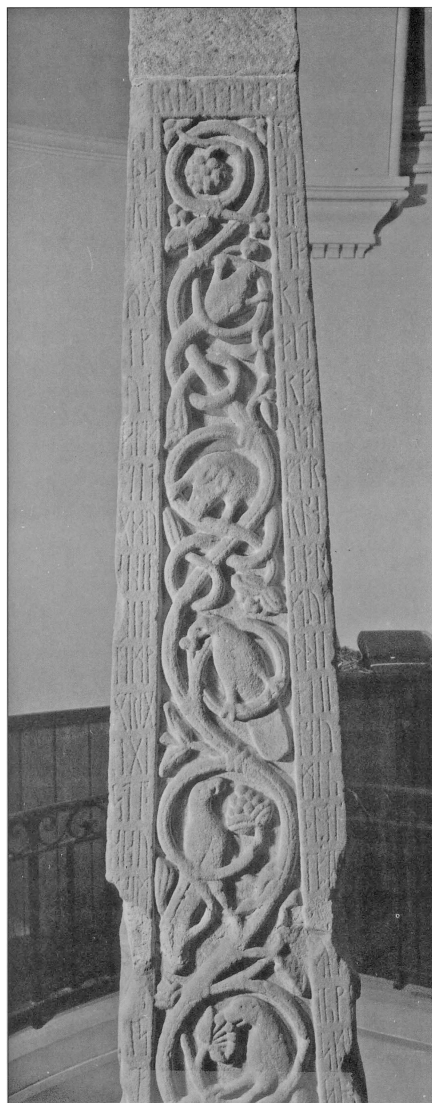


図3 ラスウェル（リズル）の十字架，南面部分（現西面：両脇にルーン語の詩文）ダムフリー，スコットランド

された。1802年にラスウェル教会の牧師だったヘンリー・ダンカン（1799-1843）が教会の庭に打ちすてであった地元の赤砂岩の断片を集めて再構成し，教会の庭に置いた。十字架は1882年に制定された古記念物保護法により，1887年に国有記念物と認定され，同年教会の中に移されて現在に至っている。残念ながら，横材は復元されず，1823年のダンカンによる復元には科学的根拠がなかった。現在の概要や動物文様は整合的ではないが，十字架の三次元性は保たれている。

成立年代に関して様式的，教会誌的，言語学的，歴史的観点から議論されているが，研究者の意見は一致していない<sup>29)</sup>。アイルランド教会の影響もあってイングランドには大型の石造りの十字架が建立されているが，その多くは死者の墓碑としての性格をもっている。リズルの十字架の図像は埋葬者の墓碑とは考えられないため，単独で建てられていたがそれを前にした典礼に用いられた可能性が高い。

全体としての図像内容はかなり複

雑だが、碑文もラテン語とルーン語が混在しており、『十字架の夢』はルーン語で刻まれている。この文字で書かれた碑文が他にないわけではないが、当時でも一部の人にしか読めない難解なものである。内容的には次節で扱う10世紀末の詩文と一部合致するので、8世紀から10世紀の間にもともとあった詩文に加筆されたと考えられるが、誰がどの程度付け加えたかについては意見が分かれる。

この宗教詩が制作されたことについて池田は、後述する聖ヘレナが発見した木の十字架の断片が、614年にペルシャ軍に攻略されたエルサレムで奪い去られ、629年に東ローマ皇帝ヘラクレイオス（575頃-641、在位610-41）が奪い返したできごとや、ユスティニアヌス2世（668?-711、在位685-95、705-11）から贈られた木片がローマで一時所在不明になり、教皇セルギウス1世（650-701、在位687-701）のときに発見されて祝祭が催されたことに言及して、十字架の木片に対する崇敬の強さを想像している<sup>30</sup>。ノーサンブリア修道院長チェオルフリド（642頃-716）がたまたまローマに滞在していて701年に帰国しているのが、彼が十字架崇敬の強さを伝えたと考えられる研究者もいる<sup>31</sup>。

この彫刻十字架が最初に彫られたと推定される7世紀末から8世紀にかけての時期は、アングロ＝サクソンによるイングランド支配が最初の安定期を迎えたときである。7世紀末から8世紀初頭のノーサンブリアは、ヤングによれば、宗教的、学問的にこの詩作に適した環境であった。それはカスパート（634頃-87）やクロウランドのグスラック（674-714）のような聖人の熱意によって育まれたものである。また、尊者ベータ（672/3-735）やヨークのアルクイン（735?-804）のような神学者を擁した、おそらく当時の西ヨーロッパで宗教的にもっとも先鋭な精神が広がっていた。造形の面では、ウェアマス＝ジャローのような大修道院が建てられ、リンデスファーンの聖書が制作され、ヒベルノ＝サクソン様式と呼ばれる、アイルランドとアングロ＝サクソンの交流の結果生まれた美術が花開いた（以下便宜上、細部の論争を略してイングランドあるいはイングランド教会と呼ぶ<sup>32</sup>）。

その一方で、聖像崇敬の是非をめぐりビザンツ帝国で潜在化していた論争が、726年の皇帝レオン3世（685頃-741、在位685-741）による禁止と破壊行為で顕在化し、その混乱はヨーロッパ中に広がって、イングランドの聖職者もその論戦を意識していた<sup>33)</sup>。初期のイングランド教会には、聖像の性格に関する議論はほとんど残されていない。カンタベリー大司教となった、タルススのテオドール（602-90）という東方出身の神学者が、680年にハットフィールドで行われたイングランド教会の会議<sup>34)</sup>を統括し、ここでローマ教会とイングランド教会が信仰上完全に同調することを定めた649年のラテラン会議の決定が受け入れられることになった。<sup>35)</sup>

古英詩『十字架の夢』の発想の原点には外典とされた3世紀の『ペテロ福音書』があったとみなすホーガンは、ロースス（現アルズズ：トルコ）教区で典礼として用いられていたこの福音書が、テオドールによってイングランドにもたらされたとする彼の仮説の状況証拠を次のようにあげている。ロースス教区での『ペテロ福音書』使用が190年頃アンティオケイアの司教セラピオン（191-211）によって禁止されたとするエウセビウスの記録があること、また、近代になってアフミーム（エジプト）で発見されたこの福音書写本の断片が、アンティオケイア派の神学的方法を示していることから、同派の聖書解釈の代表者でもあったテオドールがもたらした可能性があるというのである<sup>36)</sup>。

信仰における十字架使用の是非について、聖画像を破壊し十字架をすすめるレオン3世は、聖像擁護論者が根拠としているイエスの人間性を低くみていたと推察され、ニカイア公会議（325年）で異端とされたアレイオス派に近いものがある<sup>37)</sup>。これに対して、十字架はゴルゴタの丘という刑場にあった処刑の道具に過ぎず、十字架への崇敬を禁じる考え方もあった。この立場を鮮明に示したのは、中世最大の異端といわれたカタリ派である<sup>38)</sup>。

千年王国説において、1000年というキリストの再臨も間近い時期に、終末論的意味をもつ生きた光の十字架を扱うことは意味があったと思われるが、古英詩『十字架の夢』の作者あるいは注文者は、そうすることで異端の嫌疑がかけ

られるかもしれない危険なモチーフを避けようとした。中世末とは違い、キリストの苦しみは詩の中では明示されなかった。救世主に対してなされた責め苦を表わすことは、異端だと解釈されることもあったのである。したがって、イエス自身はたくましい姿で表わされ、彼の苦しみはその代理である十字架に移された。詩における十字架の機能は、まずはこの代理機能である。

3-2 ヴェルチェリ写本 [図4]

リズル十字架の詩文と同じ内容を含むより長いヴァージョンが、今度はアングロ=サクソン語で書かれて羊皮紙のコーデックスに収められている<sup>39)</sup>。文字

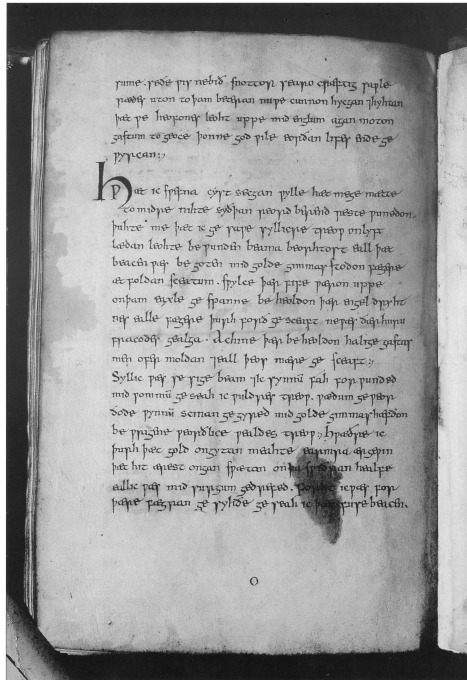


図4 『ヴェルチェリ写本』 fol. 104v, 10世紀, 聖アンドレアス聖堂, ヴェルチェリ

の字体からイングランドで制作されたことはあきらかで、ウェセックスのセルディック（チエルディッチ，?-534）王たちの統治による第2の安定期が、デンマーク王の侵入によって破壊された頃に書かれた。今日まで残るアングロ＝サクソンの古詩文は非常に少ないが、イタリア、ヴェルチェリの聖アンドレアス聖堂に保管されたことが幸いして、写本の保存状態も良好である。この地は北からのローマ巡礼の係留地だったため、イングランドからの巡礼者がもたらしたという説、巡礼者を乗せた船が難破して岸に打ち寄せられたという伝説などがある。あるいは、大陸の中心部で権勢を誇ったフルダ修道院などを経て、間接的にもたらされた可能性もある<sup>40</sup>。

詩文の内容はより明確になり、夢に現れた十字架が、磔刑者の死、埋葬までの情景を語り、十字架への崇敬をすすめる。夢からさめた作者は、十字架礼賛への献身を誓い、自身のはかない生から至福の天へ向かう被昇天の祈願で結んでいる。夢あるいはヴィジョンに基づく文学で、目撃者としてメタノイア（ハートの交換）のイメージも含まれている。異端の嫌疑がかかることを恐れてか、作者はアングロサクソンの詩（『夫のメッセージ』や『エクセターの書』）に良くみられる一種の擬人化を用いた。

詩文の途中で、詩人はヴィジョン中の十字架の「衣の性格」が変わったと述べる。十字架の存在状態、成立履歴、機能が急速に変わっていくのを目撃したのである。十字架は庭木として無垢な生を始めるが、悪魔により悲惨と逸脱へ強いられ、人類の墮落の歴史を繰り返した。次に神秘の十字架として最初に現れたとき、それは光の中を揺らめき、空に昇りながら純粋な光線を発した。それは普遍的十字架となり、宇宙を四分しながら、永遠に輝いた。ここからこの詩文が、木の十字架と象徴的十字架の双方を含む、『ペテロ福音書』の内容を共有していることがわかる。

散りばめられたモチーフから詩人に知られていたと思われる中世の伝承によれば、十字架はエヴァが禁断の木の実をとった善悪を知る知恵の木から作られたものである<sup>41</sup>。ここから、十字架はキリストによって贖われた人間であり、

最初のもっとも親しい殉教者にして証人だというイメージに繋がる。また十字架はキリストをまねて、死を経験し、埋められ、復活した。倒された状態では十字架は「誰にも拷問され嫌われた道具」であるが、ヘレナによって発見され復活した後は、十字架の木は聖遺物の素材となり、金や貴石の容器に収められ、その形は暗闇で光を放つ灯台になった<sup>42)</sup>。墮落した人間にキリストを真似るように告げ、そうすることで、その復活に加わった。聖遺物や灯台として、十字架は福音書記者として活動し、墮落した人間に良い知らせをもたらした。その福音書記者の義務の一部として、遺物は旅をし、巡礼者となったという意味のことが語られる。

詩人がみたように、あるときはおびただしい血を流し、あるときは宝石を嵌め込んだ剣のようにみえる。剣であることは十字架の最も重要な機能のひとつで、十字軍が開始されたこの時期、十字架はキリストの武器とみなされたのである。コンスタンティヌス大帝の例を引き合いにだすまでもなく、剣との形態的類似性が、闘いの前後、誓いを立てるときに掲げたり、祈るときに十字架のように剣を掲げたりすることに繋がった。

### 3-3 ブリュッセルの十字架 [図5]

伝承によれば聖遺物である聖十字架の木片が用いられていた銀板貼木製十字架（高さ46.5 cm、横28 cm）が、ブリュッセルのシント・ミヒール・エン・シント・フーデレ大聖堂の聖具室にある。この十字架の来歴は1315年頃から知られており、その後アーネム（現オランダ）の聖堂などにもたらされたが、宗教的抑圧から1582年にドイツのシュタインフェルトの修道院に移された。1617年にネーデルラント大公アルブレヒト（1559-1621、在位1598-1621）が修道院から買い取り、1650年に大公妃イザベル（1566-1633）によりブリュッセルの大聖堂に移管された<sup>43)</sup>。

この十字架の銀板背面には小羊が浮き彫りにされ、ラテン語で「アグネス・デイ」と刻まれている。銀板で覆われた横木に沿って「ドラマフルわれを作る」



図5 ブリュッセルの十字架，14世紀前半，木製に銀貼，46×28 cm，  
シント・ミヒール・エン・シント・フーデレ大聖堂，ブリュッセル

と古英語で作者名が刻まれ、古英語の詩文「わが名は十字架なり。かつてわれ血にまみえふるえつつ、偉大なる王を支えまつりぬ」という詩文が刻まれている。十字架を守護とする擬人化、受難を示す血や磔刑への言及は『十字架の夢』の内容と一致する。

この十字架の来歴によれば、この詩文の内容はネーデルラントやドイツにも知られていたことになる。すなわち、地上でイエスと経験をともにした木の十字架が、栄光化されて天空で輝く生きた光の十字架になったというイメージは、この銘文だけが源泉とは限らないものの、広くヨーロッパに広がっていたことがわかる。ただし天空の十字架に死せるイエスの姿は認められない。



#### 4 聖フランキスクス（伊フランチェスコ，1182-1226）<sup>44)</sup> のヴィジョン

死せるイエスの姿を伴いながら天空に浮かぶ十字架として思い起こされるのは、聖痕を受ける聖フランキスクスのイメージである。『黄金伝説』には、聖フランキスクスにかかわる十字架の逸話がいくつか掲載されているが、天空に浮かぶ十字架は、夢のヴィジョンとして現れる。すなわち、「あるとき夢の中で、十字架にかけられたひとりの熾天使を頭上に見た。熾天使は、フランキスクスのからだに磔刑の傷をはっきり押し付けたので、フランキスクス自身が十字架につけられたように見えた」<sup>45)</sup>。この夢の後に聖痕が付いたと記されている。

フランキスクスの伝記を書いたチェラーノのトマス（1185頃-1265頃）によれば、彼らがアルヴェルナ山に隠遁していた1224年に、熾天使のように6つの翼をもち、両腕を広げ足をそろえて十字架の形をした人間の幻が現れた。これを凝視するうちに聖人の体にキリストと同じ5つの傷跡が現れた<sup>46)</sup>。後世の記述には若干の変更が加えられていて、ボナヴェントゥーラ（1217-74）はこれがキリストの磔刑像だったとした<sup>47)</sup>。図像的には、ジョット（1266-1337）が描いた半ば羽で覆われたキリストの傷から光線がでているキリスト像 [図6] にはじまり、空中に磔刑像が浮かぶヴァージョンも描かれた。

ここで、地上の磔刑図が、復活を経て栄光化し、光の十字架に変化することなく天空に浮かぶ磔刑図の登場をみることになる。地上の十字架、すなわち木の十字架発見の物語は、この頃盛んに図像化された。フィレンツェのサンタ・クロッチェ聖堂の壁画<sup>48)</sup>、ジョット派のものやアルヴェルナ山に近いアレツォのサン・フランチェスコ聖堂のアプシスにピエロ・デッラ・フランチェスコ（1416-92）が描いた連作 [図7] が知られている<sup>49)</sup>。

木の十字架が変容することなく栄光化されたことは、「人間」キリストに対する関心と共感の広まりを促したフランキスクスによる変革や、ルネサンス期の美術の人間化と無関係ではない。その一方で、天空に浮かぶ光の十字架もコンスタンティヌス大帝の称揚として、バチカン宮殿のコンスタンティヌスの間



図6

ジョット《聖痕を受ける聖フランキスクス》〈聖フランキスクス伝〉より、1325年、フレスコ・サイクル、390×370 cm、サンタ・クロッチェ聖堂、フィレンツェ



図7

ピエロ・デッラ・フランチェスカ、中央上《十字架の高揚》、中《真の十字架の発見と証明》、下《ヘラクリウス帝とホスロー帝の戦い》〈聖十字架伝説〉より、1452-66年、フレスコ・サイクル、サン・フランチェスコ聖堂、アレッツォ



図8 ラファエロ《コンスタンティヌス帝のヴィジョン》「コンスタンティヌスの間」東壁、1520-24年、バチカン宮殿、ローマ

の壁面で、ラファエロ（1483-1520）によってはじめて本格的に図像化された[図8]<sup>50)</sup>。

ラファエロの画面は必ずしも古代の文書にしたがっていないが、皇帝がヴィジョンをみた場所をバチカン丘に定め、東からの情景を東面に配置している。このことは古代文書からは確認されないが、そのできごとがキリスト教の歴史を切り拓き、バチカンを成立させたということをアピールするためのプロパガンダであろう。その一方で、皇帝軍の動きはローマの地勢に即して、現実のものとして説得性があるように構想した。同時に画家は画面の中心軸上にヴィジョンの十字架を描き、地上場面の整合性がヴィジョンの真実味を増すように工夫している。この画面が源泉となって、近代初期に天空に輝く十字架のイメージ

が再び広まることに繋がった。

プロテスタントが登場したラファエロの時代はカトリックにとって危機の時代であったが、その後も、1826年12月17日に、カトリック危機の時代の集合的ヴィジョンとして天空に巨大な十字架が現れたことが伝えられている<sup>51)</sup>。

## 5 結びに代えて——聖母の聖心の中の十字架

以上の考察を経て、本論の導入部で触れた「フレマールの画家」周辺で制作された、おそらくロヒール・ファン・デル・ウェイデン（1399/1400-64）も関わっていると思われる板絵に立ちもどることができる。ロヒールがブリュッセルに出てきたころ<sup>52)</sup>にはまだブリュッセルの十字架は現在の場所になかった。しかしながら15世紀には、古英詩『十字架の夢』にみられたような、地上の木の十字架と栄光化された天の光の十字架とがはっきりと分けられているのではなく、聖フランシスクスのヴィジョンにあったように、地上の十字架がそのままキリストの栄光化の証として天空にあることが、さほど違和感なく受け入れられたのではないだろうか。

しかしながら、聖母は磔刑を実際に目撃したとして地上に描かれるのが一般的だったため、天空に浮かぶ図像となるには何らかのレトリックが必要だったと思われる。14世紀から15世紀に登場していた聖母の聖心のモチーフ<sup>53)</sup>と関連させることで、この図像が心の状態を視覚化した説得力のあるものとして受け入れられた可能性がある。この作品そのものの考察は稿を改めることにしたい。

本稿は、令和2～令和4年度科学研究費助成事業基盤研究C（一般）課題番号20K00199「15世紀ネーデルラントにおける聖心イメージ」の一環である。

## 注

\* 本稿の聖書省名省略形、文献表記方式は *The Chicago Manual of Style*. 2010. Sixteenth edition. 512-14. Chicago and London: University of Chicago Press に準じた。

- 1) ホール 1999, 157-58.
- 2) 『茨木のキリシタン遺物』2018, 10, 27および34には、慶長6（1601）年の「佐保カラ」の墓碑、慶長8（1603）年の「上野マリヤ」の墓碑、およびギリシャ十字の文を刻む墓碑の図版が掲載されている。ギリシャ十字は、慶長15（1610）年の「せにはらまるた」、慶長18（1613）年の「小泉某」の墓碑、慶長□年8月21日の「くほまりや」の墓碑他にもみられる（『千提寺・下音羽のキリシタン遺跡』2013, 19-22）。
- 3) Stroo and Syfer-d'Olene 1996, 52-63.
- 4) ここで論題を含めて「浮遊する」としたのは、本作で描かれた状態が、空中にあるのか、自然主義的に天空高く現れたのか、象徴的に星辰を伴うのかよくわからないためである。少なくとも地上に固定されているのではないように思われるという意味で、「浮遊する」とした。
- 5) ブリュッヘのシント・サルヴァートル大聖堂にある、15世紀前半に制作された同主題の板絵（68×69 cm）。地上で祈る聖母の前に男性寄進者が描かれている。もう一点はマドリードのラザロ・ガルディアノー美術館にある（69×56 cm）。ここでは地上で祈る聖母の前にいるのは女性寄進者である。Stroo and Syfer-d'Olene 1996, 52-55.
- 6) ホール 1999, 212-16 は 6 世紀とする。一般的な画像展開については、Schiller 1983, 98-129. 田辺 2022, 336-37 は、6 世紀の『ラブラ福音書』挿絵以前の 5 世紀初めの例として、十字架は描かれていないがローマのサンタ・サビーナ聖堂の木造扉に付属するレリーフと大英博物館の象牙浮彫をあげている。ちなみに、『ラブラ福音書』の磔刑のキリストは着衣である。Grabar 1980, 90-91 and fig. 230.
- 7) 自然界でみられる十字形として、著名なアルピニストであるエドワード・ウィンバーがマッターホルンで遭遇した類似の自然現象の写真が公表されている。Nicholson 2000, 311.
- 8) ホール 1999, 213. ローマの一般的な処刑としての磔刑については、Kelly and Quinn 1999, 3.
- 9) Horgan 1978, 11-20.
- 10) 荒井 1997, 11-12.
- 11) 荒井 1997, 12-13.
- 12) 荒井 1997, 16-19.
- 13) 『ベテロ福音書』1997, 58-59.
- 14) 後年、キリストの地獄下りは、後年煉獄やリンボ下りとして描かれることが多いが、煉獄という概念そのものは12世紀末に地獄の上層に位置づける考え方から生まれた。ル・ゴッフ 1988, 189-352.
- 15) 『ヨハネ行伝』1997, 126-30. 『ベテロ福音書』や『ヨハネ行伝』におけるイメージのルーツが旧約時代のユダヤ教関係文書にあることについては、Daniélou 1964, 265-70.

- 16) Daniélou 1964, 279-92.
- 17) Nicholson 2000, 309-11.
- 18) 皇帝は、ラバルムと呼ばれた chi-ryō モノグラム（キリストの名前を表わすギリシャ語 'ΧΡΙΣΤΟΣ' の頭文字二つ X, P) を、国家や軍の軍旗や教会の祭壇で用いるように命じた。Kelly and Quinn 1999, 3-4.
- 19) Nicholson 2000, 309-10.
- 20) Nicholson 2000, 310-11; Kelly and Quinn 1999, 3-4. 皇帝の夢が戦いの前夜だったか、先にヴィジョンをみたのかについては異説がある。コンスタンティヌス帝に現れた十字架については、異説を含めて、ウォラギネ 1984, 179-83.
- 21) エリオットは、コンスタンティヌスは皇帝になる前からキリスト教徒と繋がりがあつたとしている。Elliott 1989, 283-91. 改宗の時期については諸説ある。
- 22) 『イェルサリムの大主教聖キリル全書』1903, 2.
- 23) Nicholson 2000, 313-14. この教話の解説については、『盛期ギリシア教父』1996, 142-43. このこと以外に362年にも目撃されている。Nicholson 2000, 314.
- 24) Nicholson 2000, 312. アンブロシウス以前にも言及されているが、ヘレナの記載がない。Baert 2012, 50.
- 25) 『黄金伝説』に収録されるまでに、5世紀には逸名の作家による文書に記述があり、7世紀には十字架高揚のエピソード、12世紀には十字架の木の伝説が加えられている。Baert 2012, 50; Baert 1995.
- 26) ウォラギネ 1984, 177-95. クイリアクスの史実性は希薄である。聖十字架称賛については、ウォラギネ 1986, 404-16.
- 27) 池田 1970, 79-80.
- 28) 詩文の和訳や現代語訳は数多く発表されている。天野 1987, 3-17; 長谷川 1970, 47-57; Kelly and Quinn 1999, 36-39 (リズル十字架, ルーン語), および42-49 (ヴェルチェリ写本), および52-53 (ブリュッセル十字架). 描き起こしや、近代の研究史は, Ó Carragáin 2005, xxi-xxxi; 12-78.
- 29) Kelly and Quinn 1999, 7-9.
- 30) 池田 1970, 79-80. ローマでは、大グレゴリウス (540-604, 在位590-604) が、疫病からの保護を祈って十字架をもった行列が行われた。十字架は葬儀の時ばかりでなく、とくに危機のときに祈りの対象となった。Kelly and Quinn 1999, 21.
- 31) 池田 1970, 79-80.
- 32) Young 2001 (2022年12月1日確認). 東側で神性と人間性を併せもつキリストの性格が復活するのは843年頃である。
- 33) Kelly and Quinn 1999, 4. レオン3世はイコンの代わりに十字架崇敬をすすめたとされるが、それに関する文書は破壊されて、ほとんど残されていない。浅野 1998, 107-8.

- 34) Ó Carragáin 2005, 81–83.
- 35) Kelly and Quinn 1999, 5; Miranda 1998 (2022年11月20日確認).
- 36) Horgan 1978, 20; Daniélou 1964, 20.
- 37) 蜷川 2022, 330–33.
- 38) ブルノン 2013, 24–25; 渡邊 2008, 143–45.
- 39) 136葉の羊皮紙。各葉のサイズは31×20 cm である。字体、配分の詳細は Kelly and Quinn 1999, 15–20. キネウルフによるルーン文字入りの詩『エレネ』（聖ヘレネを扱っている）、『使徒伝』や、作者不明の「アンドレア」が含まれている。池田 1970, 54–67; Young 2001.
- 40) 長谷川 1970, 52; 池田 1970, 62–67.
- 41) ウォラギネ 1984, 177–79 および 191–92; Schiller 1985, 22–24.
- 42) ヘレナがエルサレムに残した十字架の断片は銀の箱に入れられ、後に宝石で飾られた容器に入れられたことが知られている。ウォラギネ 1984, 188.
- 43) Kelly and Quinn 1999, 22–23; 池田 1970, 77–85; Ó Carragáin 2005, 339.
- 44) Réau 1988, 516–35.
- 45) ウォラギネ 1987, 44 および 60
- 46) 聖痕と「キリスト模倣」については、小田内 2010, 133–41.
- 47) ホール 1999, 285–87; Thompson 2004, 61.
- 48) Thompson 2004, 64. 1388年から1393年にかけてアニョロ・ガッディにとその工房が真の十字架の発見と称揚を描いた壁画のみならず、1280年代にチマブエに発注された大型の十字架は、上から吊るされ、ボナヴェントゥーラにとってそれは、天と地の十字架が出会う場所を意味したとされている。
- 49) トスカーナの伝統には2種類の系統があるが、その一方の原型を提供した。Baert 2012, 50–52.
- 50) Fehl 1993, 13–17. ラファエロの早すぎる死によって注目されることは多くないが、コンスタンティヌス帝のヴィジョンとミルウィウス橋の戦闘という重要場面はラファエロ自身の手になると考えられる。制作当時は皇帝の伝記はギリシャ語のみで参照可能だったと言われ、人文主義者かプログラム制作者が必要なプロットを画家に伝えたのであろう、その一方でコンスタンティヌス凱旋門の図像は参照可能であり、エウセビウスの伝記のみならず、異教の著者による皇帝の賛辞集（XII Panegyrici Latini）も構想を助けたに相違ない。フェールによれば、ラテン語に堪能な友人と凱旋門に上り、画家がスケッチするかたわらで、友人が銘文を読み、視覚的、文学的にその秘密を探ったというエピソードがある。
- 51) 柏木 2015, 197–98.
- 52) ロヒールとブリュッセルの関係については、蜷川 2020, 68–74.

- 53) 聖母の聖心と十字架の関係は、ヘルフタの修道女たちの言説にみいだすことができる。  
ヘルフタについては、蜷川 2021.

### 図版出展一覧

- 図1 Stroo 1996 / 図2 『世界美術大全集』6 (ビザンティン美術) 1998 /  
図3～5 Kelly 1999 / 図6 Public Domain / 図7 Public Domain / 図8 FehI 1993

### 文献一覧

- 『イエルサリムの大主教聖キリル全書』1903. 堀江復訳. 正教会事務所.  
『茨木のキリシタン遺物—信仰を捧げた人々—』2018. 茨木市立文化財資料館編. 茨木市教育委員会.  
『盛期ギリシア教父』1996. 宮本久雄編訳. 中世思想原典集成2. 上智大学中世思想研究所, 平凡社.  
『世界美術大全集』6 (ビザンティン美術) 1998. 高橋榮一責任編集, 小学館.  
『新共同訳 聖書』2004. 日本聖書協会.  
『千提寺・下音羽のキリシタン遺跡』2013. 茨木市教育委員会編. 茨木市教育委員会.  
『ペテロ福音書』1997. 田川健三訳, 荒井編 1997 所収.  
『ヨハネ行伝』1997. 大貫隆訳, 荒井編 1997 所収.  
浅野和生. 1998. 「前期ビザンティン美術. 新しい帝国とキリスト教美術の確立」『世界美術大全集』6 (ビザンティン美術).  
天野絃一. 1987. 「古英詩「十字架の夢」試訳」『金城学院大学論集, 英米文学編』28: 1-20.  
荒井献. 1997. 「新約聖書外典—その意義と文学的・思想的性格—」, 荒井編 1997所収.  
荒井献編. 1997. 『新約聖書外典』講談社文芸文庫.  
池田正. 1970. 「古英詩「十字架の夢」」『文学論集, 愛知大学人文社会学研究所編』42: 53-85.  
ウォラギネ, ヤコブス・デ. 1984. 『黄金伝説』2, 前田敬作, 山口裕訳, 人文書院.  
ウォラギネ, ヤコブス・デ. 1986. 『黄金伝説』3, 前田敬作, 西井武訳, 人文書院.  
ウォラギネ, ヤコブス・デ. 1987. 『黄金伝説』4, 前田敬作, 山中知子訳, 人文書院.  
小田内隆. 2010. 『異端者たちの中世ヨーロッパ』日本放送出版協会 (NHK ブックス).  
柏木治. 2015. 「フランスの王政復古と幻視—天空の十字架, 大天使の出現, 蘇る聖遺物崇敬—」『欧米社会の集団妄想とカルト症候群』浜本隆志編著. 明石書店.  
田辺幹之助. 2022. 「磔刑」『キリスト教文化事典』キリスト教文化事典編集委員会, 丸善出版.  
蜷川順子. 2020. 「15, 16世紀の南ネーデルラントにおける市庁舎と正義図—メヘレン, ヘント, ブリュッセルの場合—」『關西大學 文學論集』69(4): 47-81.



- 蜷川順子. 2021. 「ヘルフタ女子修道院と聖心崇敬—聖母の聖心への造形的アプローチへむけて」『關西大學 文學論集』71(1・2): 31-63.
- 蜷川順子. 2022. 「キリスト教美術の中のイエス」『キリスト教文化事典』キリスト教文化事典編集委員会. 丸善出版.
- 長谷川寛. 1970. 「アングロサクソン宗教詩「十字架の夢」—訳と解説」『日本大学農獣医学部一般教養研究紀要, 日本大学生物資源科学部』5: 47-57.
- ブルノン, アンヌ. 2013. 『カタリ派: 中世ヨーロッパ最大の異端』山田美明訳. 創元社.
- ホール, ジェームズ. 1999. 『西洋美術解説事典』高階秀爾監修. 河出書房新社.
- ル・ゴッフ, ジャック. 1988. 『煉獄の誕生』渡辺香根夫, 内田洋訳. 法政大学出版局.
- 渡邊昌美. 2008. 『異端者の群れ: カタリ派とアルビジオア十字軍』八坂書房.
- Baert, Barbara. 1995. *Het "Boec van den Houde."* KAWLSK.
- Baert, Barbara. 2012. "The Legend of the True Cross Reconsidered: A Discovery in the Grotto Church of Andria, Italy (fifteenth century)." *Artibus et Historiae* (IRSA s.c.) 33 (66), 49-74.
- Daniélou, Jean. 1964. *The Theology of Jewish Christianity*, translated and edited by John A. Baker. London: Darton, Longman & Todd; Chicago: The Henry Regnery Company.
- Elliott, T. G. 1989. "Constantine's Early Religious Development," *Journal of Religious History* 15: 283-91.
- Fehl, Philipp P. 1993. "Raphael as a Historian: Poetry and Historical Accuracy in the Sala di Costantino," *Artibus et Historiae* (IRSA s.c.) 14(28): 9-76.
- Horgan, A. D. 1978. "'The Dream of the Rood" and Christian Tradition." *Neuphilologische Mitteilungen* 79(1): 11-20.
- Grabar, André. 1980. *Christian iconography: a study of its origins*. New Jersey: Princeton University Press.
- Kelly, Richard J. and Ciarán L. Quinn. 1999. *Stone, Skin, and Silver: A Translation of The Dream of the Rood*. Litho Press. Kobe University Repository Kemel.
- Miranda, Salvador. 1998. *The Cardinals of the Holy Roman Church*.  
<https://cardinals.fiu.edu/bios676-ii.htm>
- Nicholson, Oliver. 2000. "Constantine's Vision of the Cross," *Vigiliae Christianae* 54(3): 309-23.
- Ó Carragáin, Éamonn. 2005. *Ritual and the Rood: Liturgical Images and the Old English Poems of the Dream of the Rood Tradition*. Toronto: University of Toronto Press; London: British Library.
- Réau, Louis. 1988. *Iconographie de l'art chrétien*, t. 3. Kraus Reprint.

- Schiller, Gertrud. 1983. *Ikongraphie der christlichen Kunst* Bd. 2. Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus G. Mohn.
- Stroo, Cyriel, and Pascale Syfer-d'Olne. 1996. *The Flemish Primitives I: The Master of Flémalle and Rogier van der Weyden Groups* [Catalogue of Early Netherlandish Painting in the Royal Museum of Fine Arts of Belgium]. Brussels: KIK/IRPA.
- Thompson, Nancy M. 2004. "The Franciscans and the True Cross: The Decoration of the Cappella Maggiore of Santa Croce in Florence." *Gesta* 43(1): 61-79.
- Young, Karl. 2001. "A Dream of the Cross."  
In: <https://www.thing.net/~grist/ld/young/ky-drc.htm>